宰府画報

第28号

2025年10月
（令和7年）

発　行
太宰府市教育委員会
文化財課

バックナンバーはこちらから

逸品探訪

猩々図

筑紫野市歴史博物館

齋藤秋圃作

紙本著色　屏風装　143.0 × 295.2㎝　江戸時代後期

お酒が好きな霊獣

猩々は中国の書物に記される想像上の生き物です。人面で長髪、酒を好んでよく踊り、人の言葉が理解できるそう。日本では、髪は赤く海中に住むという設定が加わって、能の演目「猩々」は、高風という親孝行の男の夢に現れた猩々が酒を飲みつつ舞い踊り、目覚めるとそこには飲んでも尽きない酒壺がのこっていた、というおめでたい筋書きです。

さて、本作の画面には、能舞台さながらの大きな松の木のもとで酒壺を取り囲む、多数の猩々が描かれています。壺中に満ちた酒に映る自分の顔を見てほほえむ者、大盃を頭にかざしてみる者、柄の長いひしゃくを片手に持って楽しげに踊る者など、様々な猩々の姿があります。

秋圃得意の表現

4頭身ほどの小柄な体形に柔和な表情、ユーモラスな雰囲気を持つ人物表現は、《葵氏艶譜》（福岡市博物館ほか蔵）や《十二ヶ月風俗図絵巻》（九州歴史資料館所蔵）など齋藤秋圃の代表作に通じるものです。また、斜め方向に幹を伸ばす松や、しなやかで流麗な描線が美しい浪の表現も秋圃作品の特徴を示していて、本作は秋圃の持ち味がよく発揮された作品といえます。制作年は不詳ですが、落款の書風および作風から70代の作ではないかと推察します。ちなみに福岡市東区奈多の志式神社に秋圃の描いた猩々図絵馬（天保5年〈1834〉奉納）が、朝倉市秋月博物館にも小品の猩々図があり、秋圃お得意の画題だったことがうかがえます。

秋圃は下戸だった？

昭和8年（1933）の九州日報に連載された許斐友次郎による秋圃伝には、お酒にまつわる秋圃のエピソードが紹介されています。これによると秋圃は元来酒が苦手だったらしく、秋月藩主黒田長舒公が茸狩りに出かけて興に乗り、大盃の酒を飲み干した者にこれを授けようと言ったところ、誰も手を出そうとしなかったので、秋圃は意を決して見事これを飲み干し、さらに猩々よろしくその盃を頭上にいただいて舞を踊った、というのです。

酒嫌いかどうかの真偽はさておき、秋圃の心意気と機知に長けた人となりが垣間見えます。（井形栄子）

調査見聞

秋圃が描いた狸たち
―上方絵画様式の受容

狸のイメージ

株式会社スタジオジブリのアニメーション映画「平成狸合戦ぽんぽこ」の主役として人気を博した狸は、東アジアに分布するイヌ科の動物です。日本では、古くは妖怪じみた性格を持つ動物と考えられていましたが、江戸時代後半には愛嬌のある狸イメージが定着しました。店や家の玄関に佇んでいる姿をしばしば見かける信楽焼の狸はその代表です。今回は斎藤家資料から、おのずと暖かな気持ちになるようなユーモラスな狸の絵を取り上げます。

図1《狸図》紙本墨画淡彩　1紙　34.0×24.4cm
斎藤家資料

斎藤家資料に見る狸

《狸図》【図1】の狸は、まるで人間のように座り、両肢の間から大きな尾を前方に出して、太鼓腹の上に前肢を載せています。狸の背や肢や尾は、輪郭をとらず、褐色を混ぜた筆を面的に刷き、墨のカスレで毛のふわふわした様子を表しています。眼鼻と指先は墨のラフな線で描き、真ん丸な目と端を上にあげた口元によって、笑っているかのような表情をつくりだしています。右目に描き直しが見られ、画面右上に「上に半月あり／右」と墨書があるため、先行作品から背景を省略して模写したと考えられます。

《色絵薄に狐狸図蓋付茶碗》は、7組の茶碗の外面に風に揺れる薄の群れを、蓋の内面に狐か狸を1枚につき1匹描いています。狐は5図で、そのうち4図は僧に化けた白蔵主（僧に化けたキツネ）の姿【図2】、1図は花嫁姿で【図3】、いずれも擬人化されています。狸は2図で、そのうち1図は座り【図4】、もう1図は後ろ肢で立ち上がり【図5】、いずれも前肢を手のように前に差し出し、丸い目と少し開けた口元で、やはり笑っているように描かれています。白地の器の肌に褐色と赤の二色で簡潔に図柄を線描し、秋草と狐狸という植物と動物モチーフを組み合わせ、狂言「釣狐」にもとづく白蔵主や狐の嫁入りの説話を表すなど、意外性や文学性を感じさせる洗練されたデザインです。これらの愛嬌たっぷりの狸たちは、一体どのような先行作品からうまれたのでしょうか？

図2

図3

図4

図5

《色絵薄に狐狸図蓋付茶碗》陶製　七組　斎藤家資料

狸の画題の流行

京都を中心とした円山四条派や大阪を中心とした森派など、写生派と呼ばれる画家たちは、狸の絵をしばしば描いています。円山四条派の売立目録をみると、【図1】のように座った狸の上方に月が描かれている作品や、狐図との対幅、または薄と月と3幅対にした狸図をいくつも確認できます。【図2】の「白蔵主」に近い図様も多く見受けられ、秋圃が円山四条派や森派といった上方の先行作品から学んだことがうかがえます。

蕪村に「秋惜しむ戸に音づるゝ狸かな」（『平安廿歌仙』明和6年刊）の句があるように、狸は冬の季語として俳句に詠み継がれ、人々に親しまれてきました。近年、野生動物が生息域を広げ、狸も街中に出没するようになったと聞きます。狸には攻撃性はないとのことなので、もしも夜道でばったり出会っても、合戦を避け静かに見守ってあげましょう。

（小林知美）

いちまい
画稿鑑賞

齋藤家資料 美人図（お多福図）

大河ドラマ「べらぼう」は江戸時代のメディア王・蔦屋重三郎の生涯を描いていますが、重三郎と共に江戸文化を盛り上げた一人が太田南畝です。

齋藤家資料には太田南畝の雅号「蜀山人」が記された画稿が存在します。女性が振り向きざまにこちらを見る、見返り図の構図を取り、着物の絵柄（草花）がハッキリ描かれ、色注で着物の色を細かく記しています。

画面上の漢詩は天明4年（1784）の南畝の狂歌集『檀那山人藝舎集』に載っているもので、「美女不如悪女情　莫嫌二満与三平　阿亀阿徳阿多福　尽是息災延命名」（美女は悪女の情に如ず、二満と三平とを嫌う莫かれ、阿亀・阿徳・阿多福、尽く是れ息災延命の名）と書かれています。ふくよかな顔の女性が健康で長生きするという詩の内容を考慮すると、美人図というより、お多福図とした方が適切かもしれません。

齋藤秋圃と南畝の関わりはこれまで確認されていませんが、秋圃が上方で活動していた時代、ちょうど南畝も大坂に来ています。南畝は享和元年（1801）、大坂銅座に奉行として赴任し、『銅座御用留』や『蘆の若葉』でその様子を描いています。蜀山人という雅号は、南畝が大坂に来てから使用し始めたとされ、この画稿の元となった絵は享和年間以降に作成された可能性があります。作品を見た秋圃が模写したのか、それとも…果たして二人は出会っていたのでしょうか。（木村純也）

紙本墨画淡彩　77.4 × 26.8㎝

メイショ
メイブツ

二日市温泉 大丸旅館の温泉噴出

ここに1枚の絵ハガキがあります。大正6年（1917）7月に、武蔵温泉（二日市温泉）の大丸館に温泉が湧いたことを知らせるもので、裏面の山水画に温泉噴出の様子が描かれています。

二日市温泉は、鷺田川の畔に湧き出した川湯でしたが、大正年間に各旅館で内湯の掘削が進み、当主の山田大太郎は、新泉が湯量・温度ともに素晴らしいことを、喜びをもって伝えています。

大丸館は、慶応元年（1865）に前身の田代屋が開業し、明治10年（1877）に大丸旅館と名を改めます。さらに九州鉄道の開業後に温泉街の整備が進む中で、31年に大丸館となりました。かつて湯町の中心部にあったこの建物は現存しませんが、昭和6年（1931）に大丸別荘が建てられると、こちらは本館と称されます。現在の老舗旅館大丸別荘はその支館に当たるもので、令和7年の今年、田代屋から数えて創業160年を迎えています。

九州鉄鉄道開通後の武蔵温泉場大丸旅館
太宰府市文化ふれあい館蔵

葉書の山水画には、手前の竹筒から湯が噴き出す様子が描かれ、左上には、大岩の根本から噴出する温泉が医人に類する霊薬、との賛が添えられています。作者の藤瀬冠邨は、怡土郡加布里村（現糸島市）の出身で、太宰府の吉嗣拝山の弟子となった絵師です。当時は湯町に在住していましたが、より墨に適した水を求めて大正14年（1925）に武蔵寺に移り、画室・半禅居を構えました。

葉書の宛名にある永江純一は、三池郡江浦村（現みやま市）出身の実業家・政治家で、郷里の発展に尽くしたことが知られています。（井上理香）

大丸館主・山田大太郎から永江純一宛に温泉噴出を知らせる葉書。
裏面には、湧き出す温泉を藤瀬冠邨が描いた作品を載せる。
永江文書　九州歴史資料館蔵

関係者名鑑 Vol.8

千家尊福（せんげたかとみ）

生没年　天保3～明治39（1845～1918）
関係者　吉嗣梅仙・拝山

プロフィール

出雲大社国造（こくそう）第80代。28歳で出雲大社大宮司に任命されるが9年で辞職し神道大社派（後の出雲大社教会）を設立した。のちに、元老院議管、貴族院議員を務めた他、文部省普通学務局長、埼玉県、静岡県、東京都知事、西園寺内閣法相など要職を歴任した。享年74歳。

千家尊福は出雲大社の信仰を広めるため出雲大社教会を設立し、日本各地を巡教（じゅんきょう）（布教のため各地を巡る）しています。

明治18年（1885）7月から11月にかけて尊福は巡教のため福岡県に入ります。北九州から福岡に向かいながら、各町を訪れ講話をおこない、1日で数百人から多いときは千人以上が入信し大変な人気を誇りました。10月頃に太宰府も訪れており、巡教中に詠んだ歌をまとめた『筑紫の道ゆきふり』には都府楼跡・大城山・思川・榎寺・観世音寺・水城跡・苅萱関跡など太宰府の名所を訪れて詠んだ歌が記されています。この時に拝山と出会ったようで、拝山没年頃（大正4年）に尊福が吉嗣家に贈ったとみられる和歌【図1】の序文には、福岡来訪時に拝山に親切にしてもらったことを今でも忘れていないということが記されています。また、翌19年の梅仙の古希祝賀に際しては和歌が贈られており、知己を得た拝山が依頼したのかもしれません。また現在、ホテル・カルティア太宰府に掲げられる扁額【図2】もこうした交流を機に贈られたものだと考えられます。（木村純也）

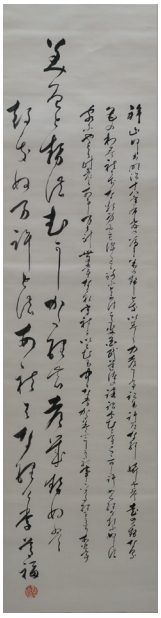


図1　《和歌》
157.7 × 40.2cm

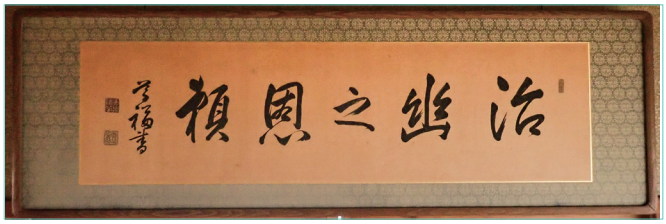


図2　扁額《治幽之恩頼》31.0 × 111.0cm　吉嗣家資料

ひとことくずし字【講】

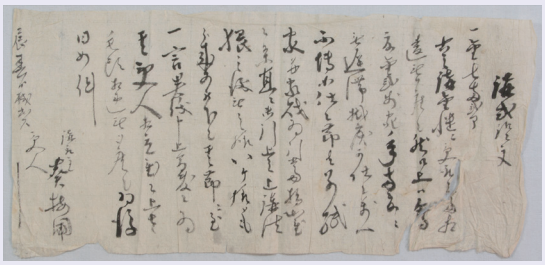
近世文書では、お金に関わる証文が多く残ります。証文を解読するために、よく使用される「講」を取り上げます。講の部首は言（ごんべん）です。典型的なくずれ方で、中国語の簡体字のごんべん「讠」とよく似ています。講のつくりの部分「冓」の上側「丱」は、「七」のようにくずされます。

「講」とは、宗教的・経済的な共同団体組織で、現代の生活協同組合のようなものです。近世において、①寺社の参詣や社殿の修復、②貨幣・財物・労力を合わせあった共同での融通、③旅宿などの同業種の商人による円滑な事業、④遊び、⑤農村で屋根葺きや馬の購入などの集団運営、これらの目的で多種多様な講が組織されました。

今回紹介したのは、講の運営主であった梅圃（秋圃の三男）が講の掛け金を金七両弐歩受け取った際の証文です。講の目的については不明ですが、講法という規則が存在していることや、年2回金弐歩の掛け戻しが約束されていることなど、講の実態を知ることができる資料となります。太宰府には天満宮を支えた講や、恵比寿講・庚申講があり、人々は共に困難を乗り越え、楽しく暮らそうと工夫していました。

（長野晃久）

この資料



《講式証文》　15.8 × 35.0cm　齋藤家資料

編集後記

酒好きに狸にお多福と、ユーモラスなキャラクターがたくさん登場しました。人物や作品成立の背景を考えるのは楽しいですね。（木）

今号のタイトル文字は少し黄味のある鮮やかな赤、その名も「猩々緋」と呼ばれる色にしてみました。新酒の季節ですね。（井）